國語讀本

高等小學校用

卷二

福岡第一師範學校
（學校圖書）

登錄番號 第　號
門 社會科學
部 教育
項 國語教授法
次 目
全　冊ノ内第　冊
分類番號 第 372.8 號
24583

T1A3
10
Ts21

明治三十年三月二十日
高等小學校國語科兒童用教科書
文部省檢定濟

文學博士 坪内雄藏著

國語讀本

高等小學校用 卷二

東京 合資會社 冨山房藏版

47902

図書 和図書 遡

a1380328801a

福岡教育大学蔵書

巻二 目次

第一課 藤原鎌足……一
第二課 名をほりつくる歌……三
第三課 東京灣……四
第四課 燈臺（上）……六
第五課 同（下）……十
第六課 玻璃の發明……十二
第七課 反射ト反響……十四
第八課 秋の山中……十六
第九課 種子の散布……十八
第十課 害蟲……二十
第十一課 源義家……二十二
第十二課 初雪……二十五
第十三課 鎌倉……二十六
第十四課 靜御前……二十八
第十五課 ペンの繪筆（上）……三十
第十六課 同（下）……三十四
第十七課 わざくらべ……三十六
第十八課 丁稚を紹介する文……三十八
第十九課 同返事……三十九
第二十課 駱駝歌……四十
第廿一課 千島……四十三
第廿二課 蝦夷錦……四十四

國語讀本 高等小學校用 巻二

第一課 藤原鎌足（フヂハラノカマタリ）

千二百餘年の昔、蘇我（ソガノ）蝦夷（エミシ）といふ大臣、其の子入鹿（イルカ）と共に、暴威を振ひ、皇室をないがしろにし、不忠の振舞多かりけり。

その頃、中臣鎌足（ナカトミノカマタリ）といふ、智勇兼備の人あり、蘇我親子の暴慢を憤りて、國家の爲めに、誅伐を行はんと企てけれども、未だ、

※ 兼備 憤 企

賢明

有力なる同志を得ざりき。

數多の皇族方の中に、中大兄といふ皇子ありき。賢明にして、勇氣ある御方なりければ、鎌足、かねてより、此の方をこそ、と思ひゐたり。或日、此の皇子、蹴鞠の御遊を催させたまふ由聞こえければ、鎌足も、參りあはせけり。

きる程に、鞠を蹴たまふはずみに、御靴、ふとぬげて、鎌足が邊りに落ちぬ。鎌足、

貢物　手答

急ぎ拾ひ取り、跪きて、奉りければ、皇子も亦た、跪きて、受けたまひぬ。このこと、緣となりて、鎌足は、皇子に親しみけり。

かくて、鎌足は、皇子と、心を合せて、蘇我氏誅伐の謀をめぐらすうち、貢物獻納の爲め、三韓の使者來朝する由聞こえければ、鎌足、これを機として、大事を行はんと欲し、蘇我倉山田麿、佐伯子麿などいふ同志と圖りて、豫め、手筈を定めけり。

※槍　伏

かくて、其の日となりぬ。　天皇、大極殿に出御あり、入鹿も亦た、御前に侍座したり。　皇子は、槍を執って、戸側に隱れたまひ、倉山田麿は、進み出でゝ、表文を讀みぬ。

さる程に、表文、將に盡きんとすれど、子麿等恐れて發せざりしかば、皇子こらへかねて、戸側より躍り出でて、立ちどころに、入鹿を誅したまひき。　入鹿の父蝦夷も、同じ日に、其の邸にて、誅に伏しき。

傍※畫

中大兄皇子は、皇位をつがせたまふに及びて、英主の聞こえあり、天智天皇と申し奉るは、此の御方なり。　鎌足は、天皇をたすけて、政事を行ひ、傍ら、制度、法律の改定に、力を盡しければ、天皇、其の功を賞したまひて、大臣となし、藤原といふ姓を賜ひき。

鎌足の功、かくの如く大なりければ、其

樞要

の子孫、相次いで、代々、樞要の地位に立ち、數百年の久しき間榮えたりき。

第二課　名をほりつくる歌

濱の砂路に、名をほりつけて、
長くもたそと思ひの外に、
ついと引きゆく引きしほ波に、
文字は洗はれ、跡もなし。

森の櫻の幹をばけづり、

そこに、我が名をほりつけおいて、
年を經て後ち、立ち寄り見れば、
あはれ、殘るは、切株ばかり。

切株

次は、堅固のねぶ川石に、
石屋頼んで、我が名をほらせ、
これぞ堅固、と思ひし矢さき、
地震で、地が裂け、うづもれぬ。

裂

重ね〳〵のしそんじ果てゝ、
やがてさとりし最上法は、

善事、善言、日毎に重ね、
人の心にしまする工夫。
活ける紀念碑かくするこそは。
今も昔も、かくするときは、
美名、萬代、萬々代よ、
人の世界の續かん限り。

第三課　東京灣

東京灣ハ、安房、上總ノ半島ト、相模ノ三

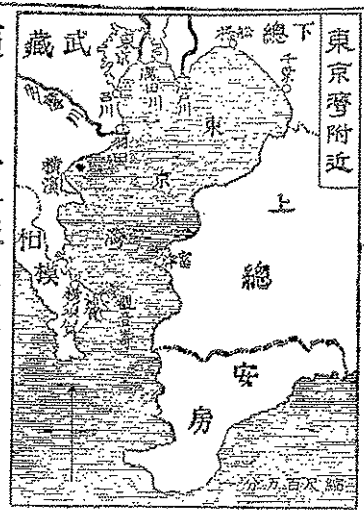
接

浦半島トノ間ニアリ。灣ノ西北ハ、武藏下總ニ接ス。南北凡ソ十三里、其ノ口ハ、南ニ向ヒテ、太平洋ニ開キタリ。

灣ノ形、譬ヘバ、囊ニ似タリ。上總ノ富津ト、相模ノ觀音崎ト、双方ヨリ近寄リテ、海峽ヲナシ、サナガラ、其ノ口ヲ取リシバルモノヽ如シ。

觀音崎ノ南ナル浦賀ハ、嘗テ、米艦ノ來泊セシ處。又、其ノ西北ナル横須賀ハ、壯

大ナル造船所ノアル處ニテ、東洋第一ノ軍港ナリ。



嚢ノ底トモ見ナスベキ邊ニハ、首府ノ東京アリ。東京ノ南ニハ、横濱アリ、東洋屈指ノ良港タリ。

其ノ他、品川、船橋、千葉等モ亦タ、其ノ沿岸ニアリ。隅田川、江戸川、多摩川等、皆、コ

屈指

ニ注グ。各地トノ交通頻繁ニシテ、商船、軍艦等、灣内ニ群集ス。

頻繁

品川沖ニ、數個ノ臺塲アリ。是レ、海防ニ備ヘントテ、德川幕府ノ末、米艦渡來ノ際ニ築キシモノナリ。近時、更ニ、觀音崎ト富津トニ、堅固ナル砲臺ヲ築キ、巨砲ヲスエ付ケテ、防備甚ダ嚴ナリ。是レ、東京灣ノ咽喉トモ云フベキ處ナレバナリ。

巨砲

咽喉

又、武藏ノ品川沖、羽田沖、横濱、及ビ、相模

ノ觀音崎等ニハ、燈臺アリテ、船舶出入ノ便ニ供セリ。

第四課　燈臺（上）

燈臺は、海岸、又は、其の近傍の岩礁の上に設くるを通例とする。闇の夜に、海上を通る船が、過って、淺瀨、暗礁に乘り上げる樣なことの無い爲めに、毎晩、之れに、あかりをつけて、航海者に目しるしを與へる。こ

岩礁

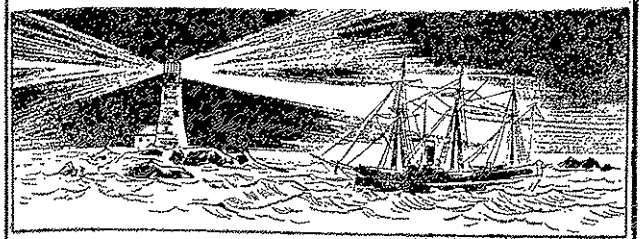
れが、燈臺の用である。

燈臺の形は、大きな煙突か、西洋風の塔かなどの樣で、內部には、頂上へ昇る梯子が掛けてあり、頂上の四面は、玻璃で、まん中に、大きなランプが備へ付けてある。

燈臺には、常に、番人が居て、ランプに、火をつけることから、其の他、一切の世話をする。番人の責任は、まことに重い。それゆゑ、至極忠實な人を選ばねばならぬ。

塔　責任　選

禍蒙　許



毎晩、必ず、燈臺のランプに、火をつけて、海上の闇を照らし、航海者に、危險なき樣注意するが、役目である。　萬一、其の務めを怠るときは、航海者は、これが爲めに、どんな甚しい禍を蒙るかも測られぬ。

北亞米利加の或海岸から、二里許の沖に、一つの小島があって、そこには、村も町も無いが、燈臺があるので、番人だけは、始終住んで居た。

始終　往　習慣

いつ頃のことか、其の番人に、マンニングと云ふものがあって、今年八つになる娘アイダと、只ふたりで、暮してゐた。　外には、只ひとりの人もゐない。

或日、父のマンニングは、油や、食料を買ふ、爲めに、向うの小港へ往くことになったが、久しい間の習慣ゆゑ、只、おとなしくし

*　鳴

て、待ってゐなよ。」と言ひ殘したきりで、やがて、小舟に飛び乘って、出かけた。

さて、マンニングは、向うの小港へ上陸して、用を辨じて居るうちに、天氣が、俄かに變って來た。空は暗くなる、風は吹き出す、雷は鳴る。恐ろしい大あらしとなった。

マンニングは、氣をもみ出した。「おれが居ねば、燈臺に、あかりをつける者がない。あかりがつかねば、沖は眞暗、さぞ、船

職掌　黑炎

乘たちが、難儀をしまう。あー困ったことになった。」と、自分の職掌を思ふと共に、娘の身の上も案じられて、心配でくならぬ。こらへかねて、無理にも、島へ歸らうとしたが、はたの人々がとめた。「此の樣なあらしに、舟を乘り出さうなどとは、氣でもちがったか。」と、聲を揃へて止めた。

とかくする間に、空は、益、暗くなって、いよいよ、燈臺に點火すべき時刻となった。マ

ンニングは、氣が氣でない。燈臺のあかりが付かぬ爲めに、難破船でもありはせぬか。自分が、職務を盡さぬ爲めに、變事があったらば、何とせう、と思った。

猶豫

かう思ふと、もう一分時も、猶豫はならぬ。人々の目をかすめて、濱へかけおり、

逆巻

荒浪の逆巻く中へ、無二無三に、舟を乘り出し、島をさして、漕ぎ歸らうとした。

筋

すると、眞暗な沖中から、ぱっと、一筋の光がさした。やゝ、たしかに、燈臺の光だ。何者が、あかりをつけたかと、マンニングは、覺えず、漕ぐ手をとゞめた。

第五課　燈臺（下）

島に殘って居るアイダは、日も暮れてしまったのに、父は歸らず、あらしは、愈ひどくなる、父の事が案じられてならぬ。こんなあらしに、とゝ樣は歸らうとして、舟に

※　衆　※

乘ってではないか。　舟がひっくりかへったら、どうしようぞ。　とゝ様ばかりではない、此の燈臺にあかりをつけねば、船乘衆の難儀にならう、とゝ様の役目が濟むまい。どうしたらよからうか、と、立ったり居たりして、氣をもんだ。

遂に、何とかして、あかりをつけよう、と決心して、けなげにも、梯子を傳って、頂上へ昇り始めた。　吹き荒れる風すさまじく、

※　覆　※　冊

山の樣な大浪は、逆巻き、うち寄せ、燈臺は、今にも覆へるか、と思ふばかりに震動する。

されど、父を思ひ、職務を思ふ一心で、アイダは、恐るゝ躰もなく、頂上に達して、さて、ランプの下に、椅子を運んで、それを、足場にして、あかりをつけようとしたが、まだ、手が届かぬ。　そこで、又、其の上に、幾冊も、本を積んで、やうくの事で、ランプに、

火をつけた。

マンニングが、舟に乘り出したのは、實に、此のとたんであった。マンニングは、ランプの光を望み見て、始めて、アイダの無事を知ったと共に、其の勇氣と注意とに感心し、覺えず、聲をあげて褒め、喜んだ餘りに、涙を落した。

嬉　　褒

マンニングが、島へ着いた頃には、風も、やうくしづまつた。マンニングは、迎ひに出た娘の顔を見て、嬉しさ餘って、「よう こそ、ランプをつけてくれた。さぞ、こはかったであらうの。」といって、泣いた。

此の夜、燈臺のあかりがついた爲めに、何十艘の船が、淺瀨にも乘り上げず、暗礁にも觸れず、沈沒もせず、何百人の水夫が無事に助かったか、測り知られぬ。

些細 偶然 端緒 旅行 調理

第六課　玻璃の發明

些細なる注意が、元となりて、偶然に、大發明の端緒を得したためしは、珍しからず。玻璃製造の發明の如きも、その一なり。

今より數千年前、亞弗利加の沙漠を旅行せし一隊の商人ありき。或朝、沙を掘りて、竈を造り、朝飯の調理を了へし跡を見るに、灰の中に、きらくと光る一粒の

珠　焚

珠ありけり。その質堅く、すきとほりて、光澤ある樣、水晶に似たり。今がたまでは、こゝに無かりしこと明かなり。さりとて、天より降り來しものとも思はれず。商人思ふ樣、こは、必ず、沙の中に、かゝる珠となるべき質の物ありて、いま焚きし火の爲めに、熔け集りたるならん。此の沙を、埃及に持ち行きて、學者に示さば、かゝる珠を製造すべき工夫もあらん。と、乃ち、

その邊の沙と共に、件の珠を取り收めて、埃及に持ち行き、或學者に示して、事の次第を語りぬ。學者受け取りて、いろ〳〵に取調べけるに、果して、沙中に、石英といふ一物ありて、彼の珠の原料たることを發見しぬ。かくて、石英を用ひ、樣々に工夫して、遂に、その珠の製法を發明しき。

是れ、即ち、玻璃製造の始めなり。

玻璃の用は、甚だ廣し。ランプのほや

※　※

に造り、藥瓶に製し、或は、板となして、窓に張り、或は、種々の眼鏡に造り、又、器械に用ふ。今の世に、玻璃なきときは、ランプありとも、電氣燈ありとも、その用をなさじ。藥品も、便宜なる入れものを缺き、家屋も、透明なる障子を缺くべし。しかのみならず、顯微鏡、望遠鏡等を作る能はざる爲め、醫學、理學、天文學などの進步遲滯せざるを得ざるべし。

※　※

透明　遲滯

かく考ふれば、今人は、玻璃製造の發明者に對して、深く感謝せざるべからず。又、玻璃の原料を發見せし、彼の注意深き商人に對しても、多少の謝意を寄すべきなり。

第七課　反射ト反響

鏡ニ向ヘバ、ソノ面ニ、我ガ姿映リ、池ノ岸ニ立テバ、水ノ面ニモ、我ガ影ヲ見ル。

何ガ故ニ然ルゾ。

光線ハ、直射スルモノナレドモ、物ニ當ルトキハ、照リ反ヘサル、之レヲ、反射ト云フ。

物ハ、皆、光線ヲ反射ス。其ノ強弱ハ、物ノ性質ニヨリテ異ナリ、通例、其ノ面ノ粗ナルハ弱ク、滑カニツヤアルハ強シ。鏡ハ、玻璃製ニモアレ、金屬製ニモアレ、其ノ表面ノ平ラカニシテ、滑カナルホド、當ノ

※

物體ノ反射スル光線ヲ、其ノマヽニ照リカヘス。良キ鏡ノ、物ノ形狀ヲ、正シク映スモ、此ノ理ニ因ル。ランプノ反射鏡ハ、コノ反射作用ヲ應用シタルナリ。又、井戸ニ、物ノ落チタル時、塗盆ナド持チ來リテ、上ヨリ、光線ヲ反射セシムレバ、井戸ノ底明カニナリテ、落チタル物ノ見ユル、亦タ、同ジ理ナリ。

谷間ナドニテ、大聲ヲ發スレバ、向ウニ

※ 趣

響 山彦

モ、人居テ、マネス、ルガ如クニ、同一ノ響ヲナス。コレヲ、山彦トモ、コダマトモ云フ。

學問上ニテハ、反響ト稱ス。

反響ノ理モ、其ノ趣コソチガヘ、光線反射ノ理ニ異ナルコトナシ。即チ、聲ノ響ガ、山ノ面ニ當リテ、ハネ反ヘサル、ナリ。

室内ニテ發スレバ、耳痛キ程ノ大聲モ、野外ニテハ、サホドニ聞コエズ。野外ニハ、反響ヲ起コスベキ物體乏シケレバナ

堂

リ。音樂堂、劇場ナドハ、コノ理ヲ應用シテ、音聲ヲ、ヨク反響セシムル樣ニ構造スルナリ。

第八課　秋の山中

※

さわがしかりし木々の蟬は、いつしか、松虫、鈴虫の聲とかはりぬ。はや、秋なり。

谷かげには、萩、桔梗など咲きみだれて、すゝきも、穗を出だす。栗の實ははじけて飛び、柿の實も、追々赤くなる。都會の人々、うち連れて、茸狩に來る。松茸、はつ茸、しめぢなど、木の根、落葉の下などに求むべし。子をはらみたるまむしの、人を見て、飛びつくも、今ぞ。

茸狩

山雀、目白、ひわ、頰白など、朝々、聲高く鳴きて、奥山より、野邊へと出づ。處々、霜おりて、谷川の邊りには、はや、赤き梢も見ゆ。

梢

高き山より湧くかと見ゆる雲、かなた

こなたの岡の頂をめぐりて、定めなく降る雨に、谷間の花は、大方しをれて、木々の葉の色、いろ〳〵になりゆく。櫨、楓は赤く、銀杏、櫨、栗、くぬぎは黄となる。その色、日に日に照りそひて、山のすがた、一度にかはり、古錦襴を懸けたるが如し。

家の軒には、干柿赤く連り、きこりは、日毎に、柴を刈りて、路ばたに積み上ぐ。

とかくするうちに、木枯の風、朝夕吹き荒れて、峯も谷も、落葉舞ひ立ち、木々の枝、まばらになる頃には、杣の煙、こゝかしこの岡に見え、獵銃の響、折々聞こゆ。

里の家々は、藁がこひとりぐにして、暫くは、冬ごもりの用心にいそがし。

第九課　種子の散布

草木の、實を結ぶは、種族繁殖の爲めなり。其の熟するに及びて、地に落つるは、

※　散布　糞

自然の妙用なり。　然れども、種子にして、悉く、同處に落ちば、發芽、生長に不便なるべければ、更に、自然の妙法ありて、種子は、諸方に散布せらる。

南天、梅もどき、さくらんぼなど、ずべて、外觀美しくして、餌となるべきものは、熟するに及びて、鳥類などに食はるゝこと多し。　かくて、其の腹に入るも、核堅ければ、そこなはるゝことなく、糞と共に出で

※　澁　※　※　啄

て、處々に散布す。　蓋し、此等の果實は、其の熟せざる間は、青く、且つ澁けれども、熟するに隨ひて、或は黃ばみ、或は赤らみ、味も亦た、甘きを加へ、さながら、心ありて、鳥類などの啄まんことを促すものゝ如し。

添※漂

豆類、及び、菜種、芥などの實は、成熟するにつれて、莢、自らはじけて、内なる種子、四方に散ず。かゝる植物の莢は、取りわけて、彈力に富めり。かたばみ、ほーせんくわ等は、殊に然り。

楓、たんぽゝ、薊などの種子には、羽或は毛の如きもの添はりたり。されば、風のまに〳〵、諸處に漂ふ。野菊、たんぽゝなどの、時としては、屋上に生じ、楓の、間、樹の

箇乃至

岐に生ひ出づるなど、これが爲めなり。牛蒡、藪じらみなどの種子には、刺に似たるもの、數多添はれり。故に、獸類の肢躰などに附着して、自ら、諸方に運ばる。かゝる自然の妙法ありて、種子は、八方に分布せらる。然れども、其の落ち止まる處、必しも、發芽に便宜なるにあらねば、空しく腐るものも、甚だ多し。一本の木、一莖の草にだに、毎年、數百箇乃至數千箇

割合　醜

の種子を着けながらも、その繁殖の度の、割合に多からぬは、此の理に由るなり。

第十課　害蟲

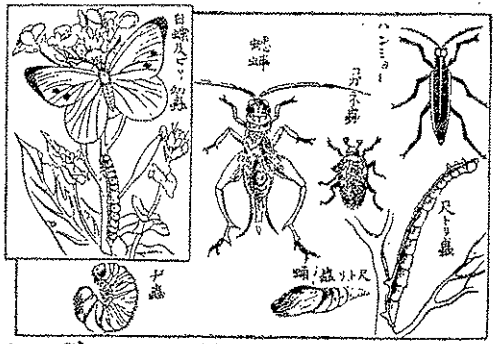
美シキ物、必シモ、有益ナル物ニ非ズ。醜キ物、必シモ、有害ナル物ニ非ズ。花ニ舞フ蝶ハ、愛ラシク見ユレドモ、蝶トナルベキ蟲ノ、植物ヲソコナフモノ少カラズ。彼ノ白蝶ノ幼蟲ナドハ、其ノ一例ナリ。

柔　蟲

蟋蟀ノ如キモ、鳴ク聲ノ哀レサヲ、歌ニモヨマレテ、ヤサシキモノト思ハルレド、ソノ實ハ、麥、大豆ナドヲ害フ害蟲ノ一ナリ。之レニ反シテ、蛙、ミヽズナドハ、其ノ姿コソ美シカラザレ、或ハ、害蟲ヲ取リテ食ラヒ、或ハ、土ノ質ヲ柔カニス。皆、有用ナル蟲ナリ。

害蟲ハ、ハンミョー、コガネ蟲、尺トリ蟲、地蟲、毛蟲等ナリ。

害蟲ハ恐ルベシ。或ハ、葉ヲ食ラヒ、或ハ、莖ニ喰ヒ入リ、或ハ、根ヲ切リナドシテ、終ニハ、其ノ植物ヲ枯ラスニ至ル。殊ニ、蝗、浮塵子等ハ、稲田ニ發生シテ、其ノ害ノ及ブ所廣ケレバ、農家ニトリテハ、實ニ、ユヽシキ大敵ナリ。



傳播迅速

浮塵子ハ、體ノ長サ、一分ニモ足ラヌ小蟲ナレド、一本ノ莖ニ、數十疋モ群リテ、其ノ養液ヲ吸收シ、稲ノ發育ヲ妨グ。其ノ幼蟲及ビ蛹モ、完全ナル六脚ヲ具フルガ故ニ、八方ニ傳播スルコト迅速ナリ。其ノ、一タビ發生スルヤ、忽チニシテ繁殖シ、風ニ隨ヒテ飛行シ、數十里ノ良田モ、一朝ニシテ荒廢スル

コト、往々アリ。

凡テ、此等ノ害蟲ハ、一年、ソノ豫防ヲ怠レバ、卵ヲ生ジ、其ノ卵ヨリ、翌年モ亦タ發生シテ、其ノ害、更ニ甚シ。農家、園藝家ハ、注意シテ、害蟲ノ種ヲ絶ツコトヲ力ムベシ。

第十一課　源義家

八幡太郎義家、奥州にて、安部貞任父子を討ち平らげ、都に還りて、凱旋の由を、朝廷に奏聞しけるに、大臣より、更に、戰爭の委細を尋ねられければ、一々答へ了りて、退出す。　先程より、始終の物語を傍聽しゐたりし大江匡房いひける樣、義家は、あっぱれの勇士なれども、未だ、兵法に明かならず、故に、大將軍の器量なし。と。　義家の從者漏れ聞きて、腹立たしく思ひ、かくと、主人に傳へけり。

凱旋　委細

聊　赴

義家、之れを聞きて、聊かも怒れる色なく、「大江先生は、當代の大學者なり。言はる〻所、必ず、深き道理あらん。就いて、教を乞ふべし。」とて、やがて、匡房の門に入り、ひたすら、兵學を學びけり。

幾程もなくて、奥羽再び亂れければ、義家赴きて、征討す。一日、或る廣野を過ぎんとせしに、一列の雁、下らんとして、俄かに亂れ散りぬ。義家、遥かに、之れを見て、

※　窺　匿　疑

いふ樣、「兵法に、飛雁、行を亂るは、野に、伏あるなり、」といふことあり。かしこの草むらに、必ず、敵の伏兵あらん。」と。窺はしむるに、果して、敵兵數百人匿れゐたり。討って、之れを鏖にしき。

其ののち、久しからずして、義家は、弟義光と、力を合せ、悉

風雅

く、奥羽を平定しき。

義家は、風雅の心深き名將なりき。初度の奥州征伐の時、磐城國勿來關といふ處を過ぎけるに、時しも、春の半ばにて、咲き亂れたる櫻の花、吹く風につれて、雪の如く散りかゝりければ、義家、馬上ながら、

「吹く風を、勿來の關と　思へども、
　みちもぜに散る　山ざくら哉。」

と詠じつゝ進みけり。

義家が、文武兼備の心がけは、大日本の武人たるにかなへり、といふべし。

第十二課　初雪

朝の風、一しほつめたく、空には、雲のゆきゝあわたゞしく、霰も降り來べき景色なり。空は、一面に曇る。風、いよ〳〵つめたし。

かたき霰にまじりて、鹽の樣なる雪、は

杭垣　※

ら〳〵と、木の枝をうつ。暫くは、さら〳〵と音たてゝ、をやみなく降る。こまかき雪、瓦屋根をうち、飛石のうへをはねて、庭じゅうに散り布く。

この音、暫くにしてやみ、つゞいて、鳥の羽根の様なる雪、ひら〳〵と舞ひ落つ。

この雪、次第に降りかさなり、燈籠の屋根、杭のかしら、垣の結目など、綿を着たる様になる。地も、一面に白く、樹々の枝、皆、滿

雪　薄日　※

開の花を着く。青き松は、重げに、枝を垂れ、南天の實は、いよ〳〵赤し。

やゝ小降りとなる。窓さきに、雀の聲聞こえ、笹の雪、をり〳〵すべる。全くやむ。空の雲、だん〳〵に晴れて、薄日の光もれ、野も山も、目も覺むる様に鮮かなり。鳥の聲、高き空に聞こゆ。

空、全く晴る。日影、一しほまばゆし。松の枝は、おのづとはね上り、軒の雫、こゝ

かしこより垂る。庭の雪は、犬の足あとより、消えそめて、野も山も、やがて、もとの姿となる。風、なほ寒し。

屏風

第十三課　鎌倉

東海道鐵道の大船停車場にて、横須賀線に乘り換ふれば、汽車は、十分時にして、鎌倉に達すべし。この地は、屏風を立て廻したるが如く、三方、岡にて圍まれ、南の方のみは開きて、相模灘に面せり。

鎌倉は、今を去る七百年以前、源頼朝、幕府を、此處に開きしより、北條氏を經て、足利氏の末に至るまで、凡そ三百年の間、繁華を極めたりし古き都會にて、歴史上の遺跡に富めることは、京都、奈良に次ぐ。

中央に、鶴が岡八幡宮あり、最も名高し。境内には、承久の昔、公曉が匿れゐたりき、といふ銀杏の大樹あり。又、靜御前が、舞

※祠　※土窟幽閉

をなしゝ堂も残れり。

その東に方りて、鎌倉神社あり、護良親王を祠る。社の後ろの土窟は、親王が幽閉せられたまひし處なりとぞ。此の邊、處々に、幕府の政廳を始め、諸侯の屋敷跡と傳へたる處あれど、今は、田畑となりて、其の面影をも留めず。

寺院

寺院には、圓覺寺、建長寺等あり。昔、五山と稱へしものゝうちの大なるものなり。

彫刻

大佛、長谷の觀音等また、名高し。當時の名工、運慶、堪慶等の彫刻せる佛像類は、これらの寺院にて、見ることを得。

盆石

南の海岸をば、由井が濱と呼ぶ。沙白くして、松青し。東には、三浦半嶋あり、西には、稻村崎あり。遙かに、盆石の樣なる

眺

江の嶋をも眺むべし。この地の西端、腰越を越ゆれば、七里が濱を傳うて、江の嶋に遊ぶべく、藤澤にも到るべし。

第十四課　静御前

兄頼朝に惡まれて、九郎判官義經は、吉野の山を、あとに見て、奥州さして、おちたまふ。

旅路

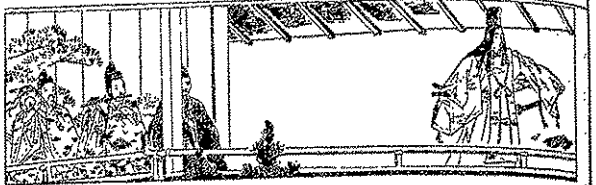
静は、君に別れつゝ、泣く〳〵行けど、積む雪に、路はふさがれ、悲しさに、胸もふさがるうき旅路。

とかくするまに、鎌倉の追手の者に捕へられ、引き出だされし鶴が岡、鳥、翼なき思ひなり。

頼朝公は、しふねくも、

＊＊　鼓　地獄

義經のゆくへ問はれける。
知らず、と言へば、しかあらば、
舞を舞へ、とぞ望まるゝ。
いなみけれども、許されず、
早も調ぶる銅拍子、
鳴らす鼓は、さながらに、
地獄の責よ、責鼓。
其の責鼓聞くにつけ、
思ふ、吉野の山いくさ。



＊　戀　＊

別れの涙かわかねば、
かへすも重き舞の袖。
思へば、戀し、吉野山、
峯の白雪ふみわけて、
入りにし人の面影の、
夢に、うつゝに、忘られぬ。
返らぬこと、と知りながら、
「しづの緒環くりかへし、
昔を今に」といふ歌を、

あはれに歌ひ、舞ひければ、
　並み居る猛き人々も、
其のまごころに感じてや、
同じ哀れに引き入れられ、
そゞろに、袂をしぼりけり。

※　※袂

第十五課　ベンの繪筆（上）

他人の助けを待たず、自分の獨力で、事を成し、自分の智慧で、工夫、發明することを、自助といふ。古今、東西とも、名高い人の中には、自助して、立身した人が少からぬ。亞米利加の畫工で、後には、名を、歐羅巴にまでも知られたベンヂャミン、ウェストの話などは、その好い例である。

智慧　畫工　片

ベンヂャミンは、今より三百年も前に、北亞米利加のペンシルベニヤ州の片田舎に生れた。小さい頃は、ベンよく〳〵と呼ばれた。父母は、貧しく暮してゐた上に、

米　畫　搖藍　肖顔

子供多であったゆゑ、ろく〳〵、教育もせなんだ。なれど、ベンは、生得の發明で、六つ七つの頃から、誰れ教へねど、畫をかき習ひ、彩色することまで心得てゐた。或日、幼い妹が、搖藍に入れられて、寢入った顔の、いかにも愛らしいのを、つく〴〵見て、つい、筆を取って、その肖顔をかいたが、是れが、兩親を驚かした初めであった。

父の知り人の、亞米利加土人が、或時、商

肝腎

用で、立ち寄ったが、ベンのかいた畫を見て、感心し、惜しいことに、繪の具が足らぬ、筆も、まことのでなささうな。繪の具には、赤と黄との、か樣〳〵の土をつかふがよい。筆は、駱駝の毛で作るものぢゃ。と、こまく〳〵と教へて、歸った。

教へられた赤と黄との繪の具は、近處の山の土から取るのゆゑ、忽ちに、手に入ったが、肝腎の駱駝の毛は、こゝらでは得ら

尻　悲　藍

れぬ。ペンは、いろ〳〵氣をもんで、考へた末、ふと、飼猫に、目をつけて、だしぬけに、おさへつけた。かはゆさうに、猫は、尻尾の毛を、一つかみほどぬかれて、悲しげに鳴きながら、逃げていった。其の日の晩には、立派な畫筆が、二本出來た。

繪の具は、土人に教へられた赤、黄、二色の外に、母にもらった染料の藍を加へて、都合三色、それを、いろ〳〵に配合して、又、い

くらかの色を得たゆゑ、ペンは嬉しく、それからは、毎日の樣に、外へ出て、山や、川や、木や、花や、鳥や、獸や、目に觸るゝ、あらゆる天然の物を手本にして、畫ばかりかいて、日を送った。

父のところへ、商用で來るりっぱな商人の中に、ペン

※　※

がいたづらがきに、目を留めて、「手本なしで、これ程にかくは、末頼もしい子である。これは、所謂天才でもあらう。ともかくも、よい手本を與へて、少し習はせて見るがよからう。」といって、深切に、油繪の具や、本當の駱駝の毛の筆や、りっぱな油繪の手本などを、わざ〳〵、フィラデルフィヤといふ都會から送った人があった。その品々が届いた時には、ベンは、家中を躍りまはり、はねまはって、喜んだ。

第十六課　ベンの繪筆（下）

眠　階

ベンは、其の晩は、ろく〳〵眠らず、翌日は、暗いうちに飛び起きて、二階の物置にはいって、朝の食事も忘れて、一心に、畫をかいた。その日ばかりでなく、その翌日も、そのまた翌日も、物置にばかりひっこもり、三度の食事時の外は、殆ど、ちらりとも、顔

を見せぬ。

その時分は、小學校へ通ってゐた頃であったが、初めは、父母とも心づかず、いつもの通り、學校へ出てゐることと思ってゐた。

缺席

すると、暫くたって、學校から、缺席の通告がきたゆゑ、始めて驚き、「さては、畫をかいてゐはせぬか」と、母親が、二階へ上って見て、「あらまー」と、あきれて、口がふさがらぬ。物置は、まるで、展覽會の様、四方の壁には、すきまもなく、油繪をかけつらね、右も左も、繪の具だらけ、畫布だらけの中に、小さい畫工が、ちんと坐って、一心不亂に、畫をかいてゐた。

叱

これ程までに、熱心に好むものを、叱って止めるでもないと、父母相談の上、師を求めて、繪を習はせることに定め、さきに、手本、畫筆等を送ってくれた、フィラデルフィヤの商人のところへ、ペンを送ることにした。

紹介　正式

さて、ベンは、その商人の紹介で、始めて、或畫工の門に入り、正式に、畫法を學び、古今の名畫を見ることを得た。　ベンは、始めて、絶妙なる名畫を見た時は、甚しく感動して、覺えず聲をあげて泣いた、といふ。

それより、大畫工とならうといふ志、いよ〳〵堅く、隨うて、學問の必要をも覺り、日々、學校へ通って勉强し、遂に、天下に、大名を成すほどの人となった。

知遇　推選

晩年には、英吉利國王の知遇を得て、凡そ四十年の間優待せられ、學士會院の院長にも推選せられたが、一千八百二十年に、十分の榮譽を荷うて沒した。　時に、九十二歳であった、といふ。

第十七課　わざくらべ

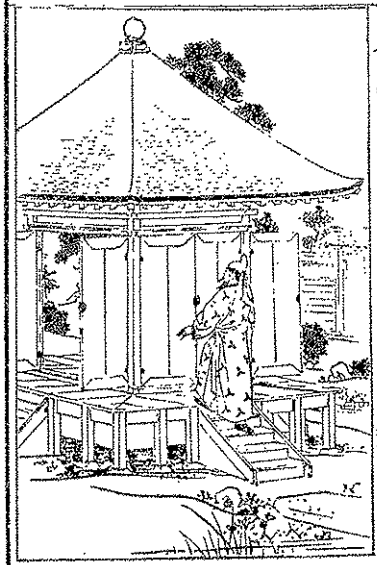
今より千百餘年前、平城天皇の御時に、百濟河成（クダラノカハナリ）といふ畫工ありけり。　河成の

何卒

壁

友人にて、其の頃、名人といはれし工人、或日、河成に向ひていふ様、「この頃、我れ、一間四面の堂を造れり。何卒、一覧の上、其の四方の壁に、畫をかきて賜はりたし。」といひけり。

河成承諾して、先方に到りけるに、げに、珍しき小さなる堂ありて、四方の戸開きてあり。何心なく、椽に上りて、南の戸口より入らんとするに、其の戸、はたとしまりたり。驚きて、西の戸口へまはれば、其戸も、またしまりて、南の戸、ひらりと明きぬ。北の戸口へまはれば、西の戸口明き、東の戸口へまはれば、北の戸口明き、如何にしても、入ること叶はず、遂に、其のまゝにして歸れり。



河成は、弄ば

弄

れて、くちをしく、何卒して、返報したし、と思ひ、數日、案を凝らしけるが、やう〳〵にして、手順整ひければ、使を、工人の許へ送り、「是非、見せ申したき畫成りたれば、入來ありたし。」と言ひやりけり。

凝　整　入來

工人は、何か返報せらるべし、と思ひながら、辭みかねて、來りぬ。　さて、音なへば、河成は、室内に坐したるまゝ、「こなたへ。」といふ。　工人は、廊下の引戸を開き、つと進

辭※

み入らんとせしに、こはいかに、内には、黑ぶくれに膨れかへり、腐りたゞれたる人のしかばね、横はりぬたり。　あなや、と驚きて、引き返さんとすれば、河成は、忽ち、聲をあげて、から〳〵と笑ひけり。

膨※　合點

何故とも、合點ゆかねば、工人は、そこにたゞずみ居たり。　やがて、河成出で來りて、「それは、畫なり。」といふ。　近寄りて、見れば、げに、まことの人にはあらで、襖に、死人

逼

をばかいたるなりけり。

名人、上手の作は、妙を極め、眞に逼ること、往々にして、かくの如きことあり。

第十八課　商館の主人に丁稚を紹介する文

拝啓、益御昌榮賀し奉り候。先般、丁稚一名御入用の由承り及び候ところ、程立ちしことゆゑ、もはや、御取極め

推察

の後かとも推察いたし候へど、相應の者見出し候まゝ、念の爲め、御紹介いたし候。當人は、山梨縣生れにて、今年十四歳、高等小學校二年級修了、身體も強壯、親元は、相當の農家の由。尤も、身元保證の儀は、小生の知人にて、引受け申すべく候。これぞといふ能のなきかはりに、どこまでも正直なるとこ

迫困却

ろ、何よりの長所かと存じ候。御都合次第いつにても伺はせ申すべく候。匆々。

第十九課　同返事

拝復、折角御紹介下され、御厚意謝し奉り候。然るところ、已に取極めたるものとして、殘念に存じ候。實は、昨日までは、心に叶ひたるものなく、入用はさし迫り、困却いたし居り候ところへ、ふと、

人柄　音

挨拶

紹介狀も持參せず、新聞の廣告を見たればとて、參りし少年、人柄らしき旨、店の者申候まゝ、兎も角もとて、呼びいれ候ところ、衣服は粗末なれども、清潔なるを着し居り、起ちる振舞もしとやかなるかた、用談、挨拶の外は、口をきかぬも、氣にのり、就中、正直げに見受け候まゝ、紹介書もなく、身元引受人も

仁　遺憾　詳察　頓首

十分ならねど、取りあへず、雇ひ入るゝに取りきめ候。御紹介の仁も、頗る適當と存ぜられ候ゆゑ、今一日早かりしならば、遺憾に存じ候。右の次第にて、御深切を無にいたし候段、御諒察下されたく候。先は、右御返事まで、此の如くに候。頓首。

第二十課　膃肭獸

膃肭獸ハ、水陸兩棲ノ獸ニテ、多ク、北方ノ海ニ產ス。鰭ニ似タル四本ノ脚アリテ、巧ミニ游泳シ、烏賊、章魚ノ類ヲ求メテ食ス。飽クトキハ、波間ニ眠ル。

游泳　飽

サレド、其ノ、群ヲナセルトキハ、一頭ハ、必ズ、見張番トナリテ、之レヲ守リ、若シ、獵船ナドノ來リテ、危害ヲ加ヘントスレバ、鳴キテ、同類ヲ呼ビサマシ、速カニ逃ゲ去ラシム。

逃

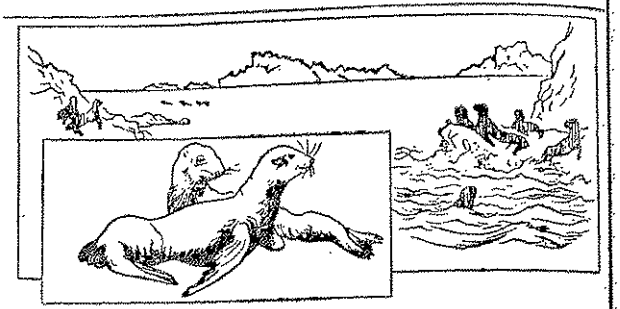
其ノ嗅覺、甚ダ敏シ。風下ニ在ルトキ

臭 操 米 糧食

ハ、遠クヨリ、獵船、火藥等ノ臭ヲ嗅ギ知リテ、其ノ身ヲ匿ス。カルガ故ニ、獵師ハ、帆ヲ操リテ、風下ヨリ進ミ、臭ヲ知ラシメヌ樣ニ、左シ、又ハ右シテ、船ノ方向ヲ變フルヲ例トス。

膃肭獸ヲ獵スルハ、所謂遠洋漁獵ノ一ナリ。サレバ、獵ニ出ヅルトキニハ、先ヅ、ボートヲ備ヘツケタル帆前船ニ乘リ込ミ、獵銃、彈藥、糧食、水ナド、イヅレモ、長キ間、

準備 米



洋中ニアルモ、不足セヌ程準備シテ、出帆スルナリ。

カクテ、膃肭獸ヲ見ルトキハ、先ヅ、ボートヲ浮ベテ、之レニ乘リ移リ、万一ノ爲メニ、食料ヲ備ヘテ、本船ヲ離レ、風下ヨリ、雁行シテ進ミ、近ヅクニ及ビテ、銃ヲ以テ、ネラヒ擊ツ。サテ、擊チ

剝 鹽漬 ※ 肌

中ツレバ、竿ノ尖ニ、鉤ノツキタル物ニテ、引キ掛ケテ、上グルナリ。終日獵シテ、本船ニモドリ、ヤガテ、其ノ皮ヲ剝ギテ、鹽漬トス、之レヲ、生皮ト云フ。

膃肭獸ノ皮ハ、其ノ始メハ、鼠色ナレドモ、刺毛トイフ荒キ毛ヲ拔キ去レバ、ツヤヨキ濃茶色トナル。コレヲ、洋服ノ襟、又ハ袖ニツクレバ、溫カニシテ、肌ザハリヨク、防寒ノ具トスルニ適當ナリ。其ノ價、

並

甚ダ貴シ。

陸前ノ金華山沖、北海道ノ厚岸沖、千島近海ナドニテハ、毎年二三月頃ヨリ、八九月ニ至ルマデ、膃肭獸ヲ獵スルコト、頗ル盛ンナリトゾ。

第二十一課　千島

北海道の東北に當りて、飛び石の樣に並べる數多の小さき島あり、是れ、即ち、千

版圖

島なり。　島の數、總べて三十餘、其の中の重なるものを、國後、擇捉、得撫、新知、繹莚、占守等とす。　これ等の島々を、殘らず合すれば、略、四國程の大さとなるべし。

千島は、もと、半ば、露西亞の領地なりしが、明治八年、樺太島と交換し、以來、全く、我が國の版圖となりぬ。　土人は、アイヌ人種なり。

國後嶋は、蝦夷本島に最も近き島にして、根室海峽を挾みて、根室と對せり。　島の西南端に、泊灣あり、船を泊するによし。

擇捉島は、群島中の最も大なるものにして、其の西海岸に、紗那といふ良港あり。

さて、占守島は、久留里海峽を隔てゝ、サイビリヤのロパトカ岬に向ひ、其の東端は、我が國の最東點に位す。　彼の、名高き報効義會員の移住して、開拓、漁獵等に從事せるは、此の島なり。

豐

千島は、氣候甚だ寒ければ、農作には便ならず。又、製造品も、未だ多からずと雖も、天然の富源、水陸共に豐かなり。殊に、海產は、世界に比類少く、鰊、鮭、昆布、鱈、獵虎、膃肭獸等は、其の重なる產物なり。

第二十二課　蝦夷錦

北海道の南部に、十勝といふ國あり。又、西部に、石狩といふ國あり。十勝岳を

宿

界となす。

今より數十年前、石狩のアイヌ衰へて、十勝のアイヌ盛んなりし頃、十勝方、石狩に攻めくる由聞こえければ、石狩方、大いに驚き、防禦の謀を議しけるが、如何ともせんすべなし。時に、一人の若者ありて、十勝の酋長を宥め還す大任に當らん、といふ。この若者は、もと、十勝生れにして、幼き時、石狩に迷ひ來り、石狩人に救はれ

剛膽　能辯　副　率

て、成長せし者なり。　剛膽にして、能辯の聞こえありき。　養育の恩に報いんとて、かくは願ひ出でしなりけり。

石狩の酋長、若者の人柄の頼もしげなるを見て、其の請ひを許し、且つ、擧げて、石狩の副酋長となしぬ。　かくて、若者は、急ぎ、旅仕度して、十勝峠に登り、そこにて、十勝勢の來るを待ちけり。

さるほどに、十勝の酋長は、數千人を率

※　舊國

ゐて、南の麓より、登り來りぬ。　若者、「石狩の副酋長なり」と名のりて、之れを迎へ、十勝の酋長に面會して、其の來意を問ふ。

酋長曰はく、「他なし。　我が十勝は、人多けれども、寶少なし。　石狩は、舊國にして、寶に富めり、と聞けり。　故に、攻め入りて、寶を得んと欲するのみ。」と。

若者曰はく、「御身は、十勝川の源を知りたまへりや。　又、石狩川の源を知りたま

へりや。」酋長曰はく、「よく、これを知れり。知りたらば如何。」若者、「二川の源を知りたまはゞ、今度の擧の非なることは、明かなるべし。それ、十勝川は、源を、大十勝岳に發す。石狩川も、亦た然り。二川は、十勝、石狩の命なり。二川の、兩國に注ぐは、母の左右の乳房より、乳汁の流れ出づるが如し。この二川の水を飲む兩國の人は、兩の乳房にすがりて、乳を飲む同腹の兄弟に等しからずや。果して、兄弟ならば、相苦め、相害ふべきにあらじ。」といふ。

十勝の酋長深く感じ、暫くは默然たりしが、やがて、いふ樣、「安心あれ、我が企は中止すべし。歸りて、石狩の酋長に告げよ、今よりのちは、十勝、石狩、互に、兄弟の交を

侵

なして、永く、相侵すことなかるべし。と。かく言ひて、十勝の酋長は、直ちに、其の兵を引き還しき、とぞ。

國語讀本 高等小學校用 卷二 終

明治三十三年九月廿九日印刷
明治三十三年十月二日發行
明治三十三年十二月廿三日訂正再版印刷
明治三十三年十二月廿六日訂正再版發行

(國語讀本 高等 與附)

卷ノ一	定價 金拾八錢	卷ノ五	定價 金廿二錢
卷ノ二	定價 金拾八錢	卷ノ六	定價 金廿三錢
卷ノ三	定價 金貳拾錢	卷ノ七	定價 金廿三錢
卷ノ四	定價 金廿二錢	卷ノ八	定價 金廿四錢

著作者 坪內雄藏
發行者 合資會社 富山房
代表者 合資會社富山房社長 坂本嘉治馬
印刷者 東京日本橋區槇町三十三番地 仁科衛
印刷所 同所 厚信舍 (電話浪花一四六番)
發兌元 (明治廿九年六月設立) 合資會社 富山房 (電話本局長距離加入一〇三六番) 電報略號 ヤマフ

不許複製